「倒幕派」としての漱石

柴田勝二

寄稿

1　漱石は「佐幕派」か？

夏目漱石の政治的な立ち位置を考える際に、しばしば用いられるものが〈佐幕――倒幕〉という、江戸時代末期の政治的抗争の図式である。そしてその場合、漱石は江戸幕府を打ち倒し、明治政府を樹立する勢力となった薩摩、長州を中心とする「倒幕派」と対峙する「佐幕派」の側に置かれ、そこに想定される反権力的な精神を作品に表出しつづけた文学者として見なされることが多かった。その代表的な論者である平岡敏夫は『漱石　ある佐幕派子女の物語』（おうふう、二〇〇一）という、文字通りの表題を持つ著作をはじめとして、漱石＝佐幕派の図式を繰り返し提示している。もっとも漱石を佐幕派として捉えるのは平岡が嚆矢ではなく、自身も言及するように、文化史家の木村毅は『明治文学夜話　新文学の霧笛』（至文堂、一九七五）で明治文学を「幕府方の産物」と見なし、薩長勢力によって疎外されがちであった地方に流れる批評精神が、漱石を含む逍遙、二葉亭、透谷、一葉といった明治期の文学者たちを貫き、一方「維新の風雲に乗じて、馬上、天下を取った藩、すなわち薩長土肥およびそれに阿附してうまくバスに乗りこんだような諸藩からは、作家は一人も出ていない」という評価を述べていた[1]。

平岡は基本的にこの木村の立場を引き継いでいるが、平岡のいう佐幕派とは、要するに時の権力におもねらない反骨精神を指している。そしてこうした精神が漱石において強く打ち出された代表的な作品として挙げられるのが『坊つちやん』（一九〇六）であった。『坊つちやん』が漱石＝佐幕派の事例とされるのは、端的には主人公の「おれ」つまり坊っちゃんが「之でも元は旗本だ」と口にする素性や、彼が佐幕側の会津出身であることを明らかにしている同僚の数学教師である「山嵐」と共闘して、英語教師の「うらなり」の婚約者であった「マドンナ」を奪い取った教頭の「赤シャツ」に制裁を加えようとする、作中の構図によっている。また作品の舞台として見なされる松山が、松山藩時代には幕府側に立って長州征伐に出兵し、そのため明治維新の際には朝敵の烙印を押されて冷遇された事実も、この図式を補強するものとして挙げられている。

『坊つちやん』を漱石が佐幕派であったことの根拠として取り上げる論者は珍しくない。小谷野敦の『夏目漱石を江戸から読む』（中公新書、一九九五）においても、坊っちゃんを佐幕派武士の形象として捉え、彼が対峙する赤シャツとその腹心的存在である「野だいこ」が、武士的なものを滅ぼしていった「近

代化政策」を象徴する存在とされていた。また小森陽一も同様に、帝国大学出身の赤シャツを「学歴」によって立身出世を果たす近代の趨勢を担う人物と見なし、反面坊っちゃんをそれに対立する点で反近代、すなわち佐幕派的存在として位置づけていた[2]。また木村毅のように、作品の具体的分析抜きに漱石を佐幕派に分類しようとする論者としては、漱石に関するエッセイを多く世に送っている、作家で歴史研究家の半藤一利が挙げられる。半藤は薩長出身者を中心とする明治政府が「東京のここかしこで大手をふっている忌ま忌ましくも、厭な時代」に漱石は少年時代を送ったとし、それを「佐幕派の漱石は一敗地に塗れた」と表現している。それにつづけて半藤は「それまで江戸っ子が手塩にかけて築き大事に守ってきた文化や気概や矜持や、さっぱりとした生き方が、西国から進駐してきた田舎者に叩き壊され踏みにじられるのを「野暮はいやだねえ」とぼやきつつも、無念の思いで眺めていたのだろう」と推察している。

半藤はそれにつづけて『坊つちやん』を例に挙げて、漱石における「野蛮」への嫌悪を傍証しようとしている。すなわち坊っちゃんが宿直当番になった夜に、生徒にイナゴを布団に入れられて騒動を起こした後の職員会議で、山嵐がぶった「教育の精神は単に学問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます」という弁舌にある、「高尚な、正直な、武士的な元気」が漱石の「佐幕派擁護の気持ち」を指し、一方「野卑な、軽躁な、暴慢な悪風」が「薩長藩閥政府」がもたらした産物とされているのである[3]。

しかし漱石がこうした対比を佐幕派と倒幕派の間に想定し、しかも前者に加担しつつ後者を糾弾しようとしていたと見なすことはできない。「高尚な、正直な、武士的な元気」が佐幕派を特徴づける性格であるというのは疑わしく、反面「野卑な、軽躁な、暴慢な」という形容が倒幕派に該当する面を持つことは事実でありながら、後で見るようにそうしたあり方に対して漱石が批判的であったとは必ずしもいえないのである。『坊つちやん』の登場人物の構図においても、この否定的な形容は明らかに敵役である赤シャツよりも、主人公である坊っちゃん自身に当てはまる。生徒のからかいに素朴に反応して騒動を起こし、赤シャツの吹き込んだ噂を鵜呑みにしてこの騒動の首謀者を山嵐と信じて、彼と一時的な対立関係に陥り、さらにとりたてて罪を犯したわけでもない赤シャツと野だいこに私的な制裁を加える坊っちゃんの所行は、まさに「野卑な、軽躁な、暴慢な」色合いを示しているといえよう。

もちろん終盤の赤シャツを標的とした制裁行為を、坊っちゃんの「高尚な、正直な、武士的な元気」の発露として捉えることも可能である。けれどもその場合、問題となるのが、それが果たして佐幕派的な属性を示しているのかどうかということなのだ。平岡や半藤らに共通するのは、〈佐幕派＝善〉〈倒幕派＝悪〉とする多分に心情的な区分だが、佐幕、倒幕という用語自体は、江戸幕府に対する政治的な姿勢を示すにすぎず、そこに善悪の色合いが伴っているわけではない。さらに漱石は江戸の末年に生まれ、幕末の抗争を経験していない以上、狭義におけるこの区分を漱石に押し当てるのは無意味でもある。しかし明治政府ないし明治国家のあり方に対する意識を表す言葉としてこの用語が機能してきたことは事実であり、そこからとり

わけ佐幕という言葉は比喩的な含意を帯びることになる。

歴史家の大久保利謙は「佐幕派」という言葉が、明治政府が樹立されてから用いられるようになったことに着目して、幕末における政治勢力としての「佐幕」と区別して「明治佐幕派」という用語を提起している。大久保は「明治佐幕派は、薩長の天下となった後に、なおこの大勢に反撥を感じてすでに倒れた旧幕府の立場に肩を持つ旧幕臣派である。したがって反薩長派である」と規定し、名指しする形ではないものの、それにつづく議論で福地桜痴（源一郎）、福沢諭吉、戸川残花といった旧幕臣たちが、「反薩長派」としての「明治佐幕派」の流れをなす言論家として取り上げられている[4]。

この大久保の規定を踏まえれば、平岡敏夫や半藤一利が漱石を位置づけようとする「佐幕派」とは「明治佐幕派」にほかならないことが分かる。けれども念頭に置くべきなのは、大久保が福地や福沢をはっきりと「明治佐幕派」の典型として挙げていない[5]ように、「明治佐幕派」の言説が必ずしも幕末の構図における佐幕側の姿勢を示しているわけではないことだ。たとえば福地桜痴の『幕府滅亡論』（一八九二）は佐幕派による明治維新成立史の代表的な著作と見なされながら、その表題に示唆されるように、そこに提示されているものは、徳川幕府が「滅亡」の道を辿り、崩壊に至らざるをえなかった経緯の、かなり突き放した叙述である。福地が「幕府滅亡」の基本的な要因として想定するものは、「黒船」の来航以来西洋列強の接近が脅威の度を強める状況下で、幕府が明確な施政の方向性を示さず、成り行きに委ねようとした主体性の欠如である。たとえば文久三年（一八六三）に、前年に出されていた攘夷の決行を督促する勅書に応じる形で、将軍徳川家茂が三千人の随員を伴って上洛したことについて、福地は次のように述べている。

> 彼の寛永の上洛は日本の政権を徳川家に掌握し、朝廷をして之を認可せしめたる憲法制定の上洛なり。諸侯は皆将軍の臣下たる実を天下に示したる勝利示威の上洛なりしに、二百余年を過たる文久三年の上洛は、将軍は主権者なれども最上主権は朝廷に在りと云ふ事を顕はせる降伏の上洛なり。外交の国是に関しては幕府は京都（寧ろ浮浪）の意に　反対するを得ざるの実を示したる示弱の上洛なり[6]。
>
> （圏点省略）

こうした形で諸外国に対しても朝廷に対しても、明確な主体性を示すことができなくなっていった徳川幕府は、「自ら雄主たるの気象に乏しくおはしけるが如し」と批判的に評される、家茂を継いだ十五代将軍慶喜の代に至って、自律的な判断力を失い、「根本已に腐朽したる幕政」と称される状態に陥る。そして幕府を支持する意味を見出し難くなった薩摩藩は、それまで反目の関係にあった長州藩と連合して、倒幕の側に回ることになったと福地は捉えている。総じて福地は「開国の主義を発揚して天下に其然らざる可からざるの事理を明示し開国政略を行はゞ、幕府の威令は猶之を永くするを得たるべき」であったにもかかわらず、遅疑逡巡して攘夷にこだわったために、時流に適応できないままに、倒幕の圧力に抗しえなかったと結論づけている。そこに見られるように、福地は「開国」を重んじる、連合以降の薩長的ともいえる視点を持っており、「幕府滅亡」に至る経緯の因果づけもそこからなされている。また現行

の薩長を中心とする明治政府についても、福地は決して否定的ではなく、「薩長論」（一八八六）では、「王制維新の初に開国の主義を定めて外交を拡張し、以て今日進歩の基礎を立てたるハ薩長の力なり」と断じ、政府の中枢が薩長勢力で占められている現状についても、「薩長の勢力を有するの人に非ざれバ、仮ひ要地に座するも其の実権を左右すること能ハざりしハ、勢の然らしむる所なりき」とそれを当然視しているのである。

2　遡及的な「倒幕派」たち

もっとも旧幕臣とはいえ、多分にオポチュニスト的な性格の強かった福地桜痴の、薩長勢力への容認を「明治佐幕派」に共通する姿勢として取ることはできないかもしれない。しかし少なくとも彼らが徳川幕府に対して共感的な眼差しを投げていたという傾向は見出されない。維新以降の趨勢においては、いずれにしても自国の政治、経済、文化を西洋諸国に侮られない水準にまで押し上げる以外の選択がない状況下で日本は国際社会の一員となっていったのであり、福地もそうした状況下で「幕府滅亡」の所以を捉えようとしていた。その点で「明治佐幕派」が〈佐幕的〉であるかどうか自体が疑わしいともいえよう。やはり幕臣で明治期の代表的な言論家となっていった福沢諭吉の言説においては、〈反佐幕派〉的傾向は一層顕著である。福沢が少年時代から権威に盲従することを良しとしない合理主義の持ち主で、民間人としての自覚のなかを生き抜いた人物であることはいうまでもない。こうした姿勢は「明治佐幕派」の規定にも叶うが、重要なのはむしろそうした精神ゆえに、福沢が前時代の幕府の権威も相対化していたことである。『福翁自伝』（一八九九）で福沢は繰り返し、自分が幕府に仕えた身であるにもかかわらず、幕府に尽くそうとする意欲が希薄であったことを述べている。たとえば「私は幕府の用をしてゐるけれども如何なこと幕府を佐けなければならぬとか云ふやうなことを考へたことがない」と明言し、その理由として「私の主義にすれば第一鎖国が嫌ひ、古風の門閥無理圧政が大嫌ひで、何でもこの主義に背く者は皆敵のやうに思ふから」[7]ということを挙げている。

もちろんその一方で福沢は維新以降の国の状況にきわめて批判的であり、『学問のすゝめ』（一八七三～七六）をはじめとする福沢の著作は、国際社会で西洋諸国と伍していくに足る水準に日本の国力を押し上げていくための提言であった。「一身独立して一国独立する」（『学問のすゝめ』）という信念のもとに言論、教育活動をおこなった福沢の批判の矛先は、薩長のような個別の政治勢力よりも、国力の構成要件としての国民の知力、精神力のあり方に向かうのであり、『学問のすゝめ』五編には「今、日本の有様を見るに、文明の形は進むに似たれども、文明の精神たる人民の気力は日に退歩に赴けり」と述べられている。『通俗国権論』（一八七八～七九）においても、福沢は「わが外国交際は官民ともにまだ十分なる地位にあらざるものと言ふべし」と見なし、「その罪一、二の人にあらず、政府の全体にあらず、また個々の人民にもあらず。罪なしと言へば政府も人民もともに無罪なり、罪ありと言へば政府も人民もともに免れ難し」と、「政府」と「人民」をともども断罪している。

福沢の言説に典型的に見られるように、明治期の言論家が国家・社会の現況に対して批判的であることと、出自としての〈佐幕――倒幕〉という対比の間に因果的な照応性はなく、薩長を中心とする明治政府に批判的であったために、幕末の構図に関しては倒幕派的な立場を取るということも珍しくない。むしろ論理的にはその方が筋が通っているともいえよう。なぜなら薩長政府に批判的であるということは、現行の政治体制に対して異議を唱えようとする姿勢にほかならず、それを幕末の構図に当てはめれば、既存の体制としての徳川幕府への否認という形を取ることになるからだ。

反面福沢については、時代に逆行する佐幕派的な精神の持ち主として見なす傾向も存在する。それは主として旧幕臣でありながら、明治政府の要職に就いた勝海舟や榎本武揚に批判の矢を向けた「痩我慢の説」（一八九一）を根拠とする見方である。ここで両者を「三河武士の精神に背くのみならず我日本国民に固有する痩我慢の大主義を破り、以て立国の根本たる士気を弛めた」存在として糾弾する福沢の論調は、徳川家に繋がる「三河武士」の側に立とうとする点で一見、佐幕派のものであるように映る。けれどももともと私信として書かれたこの文章は、必ずしも論理的に首尾一貫しておらず、福沢が勝や榎本に対して抱く不満が、別の論点に結びつけられて提示されている趣きが強い。すなわちここで福沢がもっとも力点を置いているのは、前半に述べられている、オランダやベルギーのような小国が、ドイツ、フランスといった強国に併合される道を選ばず、ヨーロッパにおける覇権のせめぎ合いのなかで独立を保とうと尽力しているということである。「痩我慢」とは、もともとこうした小国が失おうとしない気概と自尊心を指している。この小国の頑張りが、西洋列強の帝国主義的な侵攻のなかで、日本という小国が保持しなくてはならないと福沢が考えるものと重なることはいうまでもない。福沢が一義的な価値を与えるものはつねに、人民の精神的自律に支えられた一国の真の独立であり、幕府に背を向けるように明治政府の要人となっていった勝や榎本への批判は、この「痩我慢」の含意を拡張的に援用したものにほかならない。

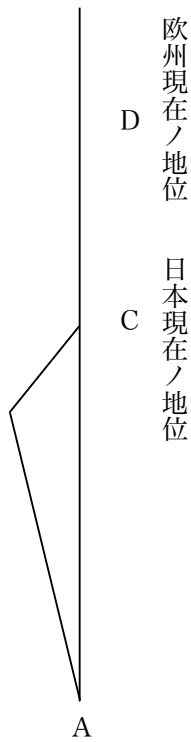
また福沢に論難されている勝にしても、西洋列強の脅威に晒されるなかでの国家の独立を第一義に考える姿勢においては福沢と通底している。『氷川清話』（一八九七～九八）に示された勝の見方によれば、幕末から明治三〇年代の現在に至るまで「上下一致して、東洋の為に、百年の大計を講じなくてはならぬ時」である状況は変わっておらず、もっとも喫緊な「国家問題」はそこにあるとされる。そして「おれも国家問題の為には、群議を斥けてしまって、徳川三百年の幕府をすら棒にふって顧みなかった」[8]と語る勝の精神はほとんど倒幕派のものであり、その価値観においては幕府に忠誠を保持しようとする意識はまったく捨象されている。その点で勝のなかに「痩我慢」が不在であることは否定し難いにしても、おそらく勝は自分に向けられた問題としての「痩我慢」には何ら意義を認めなかったに違いない。しかし福沢の本来の文脈で強調されている、小国の気概としての「痩我慢」に対しては勝は共感的であったはずであり、それは勝が「国家問題」としてとらえるものと同じ方向性を帯びているのである。

このように見れば、幕末における構図にも、また薩長政府へ

の接近の度合いにもかかわりなく、明治期の進歩的な知識人の多くが、基本的には遡及的な倒幕派であることが確かめられる。開国によって急激に国際社会のせめぎ合いのなかに投げ出された日本は、自国が非力な小国であることを意識せざるをえなかったのであり、民間の言論家、教育者としての道を歩んだ福沢諭吉にしても、政府の要職を歴任した勝海舟にしても、それぞれの立場でこの自国の劣位性を解消するべく尽力していた。その問題意識のなかでは徳川幕府を懐古的に評価する眼差しは生まれる余地がないのであり、彼らよりも幕臣としての意識を強く持った福地桜痴にしても、徳川幕府の帰趨に対しては決して擁護的ではなかった。

そして幕臣として幕府に仕えた福沢や福地が、新しい時代からの眼差しによって徳川幕府を相対化していたとすれば、明治文学の担い手となっていったそれにつづく世代の表現者たちが、現行の体制に対する批判意識によって遡及的な倒幕派としての側面をより強く持つことになるのは自然な流れであろう。そして夏目漱石はそのもっとも代表的な例にほかならないのである。とりわけ国家への批判意識と未来に向かう展望の二面性において、漱石は福沢に近似している。とくに日本が旧時代的な枠組みにとどまっていては、西洋列強と拮抗しうる文明国の域に永遠に辿り着けないと考えていた点では、漱石は福沢と同様であり、その点ではまさに倒幕派的な心性の持ち主であった。

漱石の倒幕派的な心性を示唆する言説は枚挙にいとまがない。しばしば引用されるように、作家としての出発を切っていた明治三九年一〇月二三日付けの鈴木三重吉宛の書簡で漱石は、「苟も文学を以て生命とするものならば単に美といふ丈では満足が出来ない。丁度維新の当士勤王家が困苦をなめたやうな了見にならなくては駄目だらうと思ふ」と記し、その後のくだりでも「命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい」[9]と述べている。「維新の志士」が幕臣ではなく薩長の倒幕派を指していることはいうまでもない。また『文学論』の原型をなす『文学論ノート』においては、漱石ははっきりと倒幕派の精神を肯定する評価を書きつけている。



漱石は「維新前」の地点から「現在」にかけての「日本ノ地位」の変転を右のような図に示し、「モシABノマヽニテ進マバ今日日本ヲ見ルコト難カラン struggle for existence (conscious) ノ結果ハ此方向転換ヲ余儀ナクシタル者ナリ吾等ハ此方向転換ヲ率先シテ断行セル人々ニ謝セザル可ラズ此等ノ人ノ断行ハ意識的ニ今日ノ運命ヲ作リ出セルナリ」と述べている。すなわち漱石の認識においては、江戸末期までの日本は〈間違った〉方向に進んでいたのであり、維新の成就によってようやく「欧州」に追随することのできる位置に立つことになった。そしてこの「転換」をなし遂げた者、つまり薩長の倒幕勢力に対して「謝

セザル可ラズ」という感慨を漱石は覚えているのである。この記述が、イギリス滞在中という「欧州」と日本の落差に顔を突き合わせている状況で書かれたという条件を割り引いて考えねばならないにしても、漱石が明治三〇年代半ばの地点で幕末の構図を遡及的に評価した際に、幕府の存続を支持する側にいなかったことは疑えない[10]。

こうした漱石の心性は帰国後も持続していく。晩年に近い大正三年に書かれたエッセイ「素人と黒人」（一九一四）では、「日本の歌舞伎芝居といふものを容赦なく攻撃」する漱石に対して、弟子の小宮豊隆が歌舞伎弁護の論を語ろうとすると、漱石はそれに取り合わず、次のような反応を示している。

> 自分は幕府を倒した薩長の田舎侍が、どの位旗本よりも野蛮であつたか考へて見ろと云つた。そんな弁護をする人は恰も上野へ立て籠つて官軍に抵抗した彰義隊の様なものだと云つた。羅馬を亡ぼしたものは要するに野蛮人ぢやないかとも云つた。

このくだりは一見「薩長の田舎侍」が「旗本よりも野蛮であつた」ことを指弾しているようにも見えるが、事実は逆である。「そんな弁護をする人」が歌舞伎を擁護しようとする小宮である以上、「野蛮」は当然、長い歴史を持つ伝統文化を一蹴しようとする漱石の側に帰せられる。つまり大正期に至っても、漱石は自身を「薩長の田舎侍」に見立てようとしており、彼らに想定される「野蛮」なエネルギーこそが時代の変革をもたらすと考えていることが分かるのである。歌舞伎という江戸時代の代表的な芸能に対して漱石は総じて冷淡であり、明治四二年のエッセイ「明治座の所感を虚子君に問れて」では、漱石が明治座で見た「慶安太平記」他の歌舞伎狂言に対して、「極めて低級に属する頭脳を有つた人類で、比較的芸術心に富んだ人類が、同程度の人類の要求に応ずるために作つたもの」という揶揄的な評価を与えている。また同じ出し物を見た感想を記した明治四二年五月一二日の日記では、漱石はこうした文化を生み出した江戸時代について、「徳川の天下はあれだから泰平に、幼稚に、馬鹿に、いたづらに、なぐさみ半分に、御一新迄つゞいたのである」と罵倒しているのである。

3　倒幕派の国家批判

「維新の志士」への共感を強く語り、明治維新による転換を評価し、江戸時代とその文化を侮蔑的に眺める人間が、「佐幕派」ではありえない。佐幕派の立場は、逆に江戸時代の洗練を拠り所としつつ、江戸――東京を跋扈する「野蛮」な「田舎侍」たちに距離を取ろうとするところにあるからである。こうした地点から「文明開化」の浮薄な風潮を嫌って、江戸時代に眼を向けようとする、本来の意味において佐幕派的な立場を持つ人びともいた。幕府瓦解とともに向島に隠棲し、その後『朝野新聞』の社長に迎えられ、ジャーナリストとして活動した成島柳北はその代表的な存在である。柳北の中心的な文業である『柳橋新誌』（一八六〇）では、遊妓たちの生態とともに、そこを訪れる客たちの行状もつぶさに語られ、明治七年に刊行された『柳橋新誌』二編（一八七四）では、接待に対する不満から「巨

盃を取つて婢の面上に擲つ」といったことをする薩長藩士の「狂暴」な態度も記されている。また結びの箇所では遊妓と政府の高官があえて並列され、次のような対比がなされている。

蓋し娼妓は賤女子也、歌舞は小技也。然れども勉励して之を学べば、則ち数歳にして以て其の生を養ふに足る矣。今夫れ国の大政を執る者、高爵を賜はり大禄を食ひ赫々権有り、炎々威有つて礼教未だ国に立たず、徳沢未だ民に流れざる者は何ぞ也[11]。

「娼妓」が「賤女子」でありながら、技芸の習得によって生計を立てうることと、「国の大政を執る者」が「高爵を賜はり大禄を食ひ」ながら、「礼教」も「徳沢」も国民に及ぼしえていないという対比が妥当であるとはいい難いが、それをあえておこなうことで両者を同列化しようとする柳北のアイロニーは明瞭である[12]。後に永井荷風に受け継がれていくことになる、こうした、江戸時代的な価値観に則りつつ、政府を仕切る勢力を揶揄しようとする眼差しが漱石に存在しないことは、先に挙げたエッセイで見たとおりである。漱石はむしろ「野蛮」な薩長の「田舎侍」の立場に自身を擬そうとしていたのである。

その点では漱石は明確に「倒幕派」にほかならず、それを傍証するように、漱石は江戸時代を舞台とする作品をまったく書いていない。漱石は逆に未来志向の眼差しの持ち主であり、現在称揚されている価値や人物も、百年後には無に帰してしまう可能性があることをつねに念頭に置いていた。たとえば明治三九年の「断片」には「同時代ノ人カラ尊敬サレル」ためには「皇族」「華族」「金持」「権勢家」などに「生レヽバヨイ」としながらも、「然シ百年ノ後ニハ誰モ之ヲ尊敬スル者ハナイ」と書きつけている。また同じ年の別の「断片」には「遠クヨリ此四十年ヲ見レバ一弾指ノ間ノミ。所謂元勲ナル者ハノミノ如ク小ナル者ト変化スルを知ラズや」（圏点原文）と記し、維新の立役者たちも遠い未来の時点からふり返れば卑称化されるだろうという見通しを示している[13]。

ここで見逃せないのは、今の引用にも含まれているように、〈徳川〉や〈江戸〉を侮蔑的に眺める漱石の眼差しのなかで、薩長出身者が多くを占める「元勲」も同じく相対化されていることである。すなわち漱石は心性的な「倒幕派」であると同時に、同時代の国家のあり方に批判的な「明治佐幕派」でもあったが、その二つの立場が決して矛盾するものではないことが、こうした表出によって確かめられるのである。つまり国の現況に抱かざるをえない不満が、増幅された形で遡及的に徳川幕府に向けられるのであり、今の日本が曲がりなりにも現在の水準にあるのは、倒幕勢力によって前近代としての〈江戸〉が断ち切られたからだという認識を漱石は有している。しかも漱石は福地桜痴や福沢諭吉と違って幕府に仕えたこともなく、幕末の抗争も経験していない以上、徳川幕府を肯定する心性が生まれないのは当然である。その点では漱石を「明治佐幕派」とするのは誤解を招く表現でもある。むしろ単に、明治日本のあり方に批判的であり、それゆえその前段階としての江戸時代に対して一層距離を取ろうとしていた文学者として、漱石を眺めるのが妥当な位置づけであろう。

漱石の明治日本に対する批判は、ここであらためて挙げるまでもなく、多くの小説作品、評論、講演などで語られていると

おりである。『三四郎』（一九〇八）の冒頭部分で、後に広田先生であることが分かる「髭の男」は、日露戦争にかろうじて勝利したものの、人びとが疲弊のなかに置かれている状況について、「こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戦争に勝つて、一等国になつても駄目ですね」と断言し、「是からは日本も段々発展するでせう」と言う三四郎に対して「亡びるね」と言い放つ。『三四郎』につづく『それから』（一九〇九）の主人公代助は、自分が労働しない理由として、「日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。その間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を為たつて、仕様がないさ」という状況への批判を口にする。また講演「現代日本の開化」（一九一一）では、「西洋人が百年も掛つて漸く到着し得た分化の極端」に日本人が「維新後四五十年」という短期間で辿り着こうとした結果、「一敗また起つ能はざるの神経衰弱に罹つて、気息奄々として今や路傍に呻吟しつゝある」人々が生み出される状況が出来したと語られている。

けれどもこうした批判的な言辞も、漱石がそれだけ自国の状況を慮るがゆえのものであり、彼が国家に背を向ける個人主義者であったために生み出されたものではない。「維新の志士の如き烈しい精神」で文学をやってみたいという覚悟は、それだけ自己の表現を国家の命運と強く関わらせようとする姿勢の表明でもある。この手紙が書かれたのと同じ明治三九年に出された狩野亨吉宛書簡では、「尤も烈しい世の中に立つて（自分の為め、家族の為めは暫く措く）どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためして見たい」と記され、またそれに連続して書かれた同じ日時、同じ宛先の手紙では、自分に「不愉快」や「不快」をもたらす「エヂエントを以て社会の罪悪者と認めて此等を打ち薨さんと力めつゝある」と述べられている。さらにそれにつづけて漱石は「ただ余の為めに打ち薨さんと力めつゝあるのではない。天下の為め、天子様の為め、社会一般の為めに打ち薨さんと力めつゝある」と綴っている。これはまさに「維新の志士」の気概そのものであり、こうした烈しい心性が、同時代の自国に向けられた結果が、諸作品として表象された批判的表出にほかならないといえよう。

こうした、同時代の社会に対する批判意識が、江戸時代に対する否認を引き出し、それらを共在させている意識の持ち主は、明治時代において決して稀な存在ではない。漱石の三歳年長である二葉亭四迷は、周知のように早くから日露外交を喫緊の問題と感じてロシア語を習得し、にもかかわらず外交の前線で活動する機会を得られないもどかしさのなかに表現活動をつづけたが、この文学者もやはり愛国の心性とそれを裏返した自国への憤りを内にわだかまらせていた。二葉亭の外交への関心自体が前者の表出であることはいうまでもない。その志向によって二葉亭は東京外国語学校のロシア語教授の職を捨てて大陸に渡ることになる。北京に滞在していた際に坪内逍遙に宛てた書簡（一九〇三・六・一三付）には、日露戦争の引き金になった、ロシア軍の満州駐留に対する日本政府の態度と、その背後にある日本人の国民性について、次のような記述が見られる。

近着の新聞でみると議会は相変らず妥協騒きで撤兵問題など

はねツから気乗の様子見えす何の為の妥協沙汰と呆れもすれは憤慨もされ申候　こんな事では到底駄目ニ候　もう位取りて露国に数歩を譲りゐるものといふものニ候　政府も駄目なら国民も駄目、支那に続いで亡びるものは必す日本なりと、情の激する時にはタイナマイトでもぶツけてやりたいやうに成り候へ（以下略）[14]

こうした憤懣をぶちまける二葉亭の気質の基底にあるものが、「予が半生の懺悔」（一九〇八）で語られる、「維新の志士肌」にほかならない。このエッセイで二葉亭は「私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨憂国といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果、将来日本の深憂大患となるのはロシアに極まつてる」という認識を持つに至ったことを語っている。また半自伝的な小説である『平凡』（一九〇八）では、主人公の「わたし」が長州の思想家吉田松陰の崇拝者であり、「留魂録は暗誦してたほどだつた」と述べられているが、この心性は二葉亭自身のものでもあっただろう。二葉亭も幕末の抗争を経験した世代に属さないにもかかわらず、自国の現況を刷新したいという欲求によって、それを徳川幕府に向けて実行した人びとへの共感を覚えている点では、漱石と同じ遡及的な倒幕派なのである。

こうした批判の図式は、漱石、二葉亭と同世代の批評家であった田岡嶺雲の言説にも認められる。明治三二年の『嶺雲揺曳』（一八八九）では、「維新の革命は実に幾多不平の徒の手によつて成されぬ、家もなく位もなく而かも才ある幾多浪士の経営に成りぬ、今日の弊にして極まらば、今の天下失意の才豈にまた往日の歴史を再びせざらんや」[15]と述べられ、現在の国の担い手たちにおいて「往日幕末浪士の熱誠と熱意とある頗ふる疑ふべし」という疑念が投げかけられている。ここでも倒幕派の志士たちに照らす形で、彼らを動かしていた「熱誠と熱意」の減退した結果として、人材的にはかなりの重なりを持つ現行の政治家たちのあり方が批判されているのである。また別の節で述べられている、「文明なりといふ、開化なりといふ、燦々爛々まことに人目を駭（おどろか）すに足るなり。然れどもこれ外見のみ、これ皮相のみ」といった批判も、日本人の生活に十分内在化されない文明開化の「外発」性を指摘する漱石の口吻に近似しているといえるだろう。

4　『坊つちやん』と日露戦争

このように同世代の文学者たちの言説を踏まえつつ、漱石の対社会的な意識のあり方を眺めていくと、その佐幕派的心性の表出としてしばしば捉えられる『坊つちやん』についても、それがむしろ遡及的な倒幕派である漱石の、自国への愛着と批判が背中合わせに折り合わされた作品であることが見えてくるのである。看過することができないのは、作品の執筆の時期である。漱石がまだ一高と東京帝大の教職にあった明治三九年の春に一気呵成に書かれ、『ホトトギス』同年四月号に掲載されたこの作品は、未だ日露戦争の余韻の残るなかにもたらされている。日露戦争への反応は、同時期に連載がつづけられてい

た『吾輩は猫である』の「五」章に、自己をロシア軍と戦っている日本兵に見立てた「吾輩」が、「敵」である鼠を捕ろうと奮闘する場面にも明瞭であったが、ここでも自国の重大な出来事を写し取ることによってそれへの歩み寄りを見せつつ、結局「吾輩」が何ら成果を上げることができずに終わってしまう様相の描出に、時局への揶揄的な眼差しを織り交ぜていたのだった。あるいは「八」章に描かれる、「吾輩」の飼い主である苦沙弥先生の存在を日頃苦々しく思っている資産家の金田が、中学校の生徒たちを使って、苦沙弥の家の庭に野球のボールをひっきりなしに打ち込ませ、苦沙弥がそれに対抗しようとする場面も、「沙河とか奉天とか又旅順とか」だけでなく、自分の飼い主の家を舞台としてまさに展開されている「戦争」として語られていた。

『坊つちやん』においても日露戦争への言及はちりばめられている。「三」章にある、坊っちゃんが蕎麦屋で「天麩羅蕎麦」を四杯たいらげた翌日、教室の黒板に「天麩羅先生」と大書されるからかいを受ける場面で、「一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何も芸がないから、天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだらう」（傍点引用者）という感想を坊っちゃんは覚えるのであり、文脈的にとくに必要があるとは思われない「日露戦争」という国家的な出来事とあえて関連づけられている[16]。あるいは後半の「十」章の、坊っちゃんが「山嵐」とともに中学校と師範学校の生徒たちの喧嘩を止めに入る場面でも、巡査がやって来たのを見た生徒たちが一目散に逃げていく様を描写するのに、「田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンよりも旨い位である」と、日露戦争時のロシア軍の極東軍総司令官の名が引き合いに出されている。クロパトキンは極東軍の指揮を執りながら、消極的な作戦を取りがちであったところから「退却将軍」とあだ名された軍人であったが、ここでも人間同士の衝突が戦争という国家間の争闘に結びつけられている。

そう考えれば、この作品の舞台のモデルとして、漱石がとくに愛着を持たず、十年前に去った松山が取られていることの理由もたやすく理解することができるだろう。なぜなら当時の松山は日露戦争にきわめて縁の深い都市だったからだ。日本の勝利に大きな貢献をした秋山好古、真之兄弟は松山の出身であり、しかも弟の真之が、漱石の親友であった正岡子規と知己の間柄であったことは知られるとおりである。またこの地に設置されていたロシア兵の捕虜収容所は、主として将校クラスの軍人を多く収容していたところから、日本でもロシアでも捕虜収容所の代名詞的存在として知られていた。松山の名所である道後温泉は、行動の自由をかなり与えられていたロシア兵捕虜たちの落とす金によって潤っていたのである。したがって主人公が温泉に連日通う『坊つちやん』に、ロシア兵捕虜の姿が現れても不思議ではない。日露戦争時に時間が設定されているなら、その方が自然であるともいえるが、むしろロシア兵捕虜を登場させない描き方が、この作品を覆っているものを示唆しているといえよう。すなわち坊っちゃんの赴いた先が〈ロシア〉の比喩としての意味を持つために、逆にその空間に具体的なロシア人の姿を出すことができないのである。

この作品で〈ロシア〉の比喩として登場するのは、第一にロシアを象徴する色である「赤」をつねに身にまとい、釣りに行っ

ても坊っちゃんが釣り上げた「ゴルキ」について、「ゴルキと云ふと露西亜の文学者みた様な名だね」とロシアへの言及を口にする、教頭の「赤シャツ」である。もっともこの人物がなぞらえられるのがロシア一国に限定されず、維新以降、日本が文明の先達として模倣の対象としつつ、日本に対しては軽侮の眼を投げつづけた西洋列強全般に拡張されることはいうまでもない。そこには当然、漱石の留学先であったイギリスも含まれる。周知のように漱石は二年半をイギリスで過ごしながら、それを「尤も不愉快の二年」（『文学論』「序」一九〇七）と称するような〈イギリス嫌い〉になって帰国することになった。平岡敏夫はこの漱石の経験を踏まえて、『坊つちやん』の舞台である四国の小都市をイギリスに見立てている。平岡がこの見立てをおこなう根拠となるのは、主として赴任先で坊っちゃんがつねに自分の行動を他人に監視されている感覚に捉えられ、その結果生徒たちに「神経衰弱」であると評されるまでになる様相が、漱石がロンドンで陥った状況に相当することだが、そこから平岡はこの作品の素材となったものが、松山体験である以上にロンドン体験であると推察している[17]。

この見立ては妥当なものであり、また坊っちゃんの赴任先を〈西洋列強〉の比喩と見なす根拠となる要素は他にも様々に見出される。たとえば坊っちゃんが教室の生徒たちを「大きな奴ばかり」と感じ、一方自分が「江戸っ子で華奢に小作りに出来てゐる」と見なす対比も、〈西洋人〉に向かった〈日本人〉のイメージを想起させずにいない。『吾輩は猫である』の、家の庭に野球ボールを打ち込む生徒たちと苦沙弥が張り合う構図が日露戦争と結びつけられていたことを踏まえれば、坊っちゃんが物理的に対峙することにもなる生徒たちもはやり〈ロシア兵〉の比喩としての性格を帯びている。だからこそ彼らのいる教室に臨もうとする坊っちゃんは、最初「敵地に乗り込む様な気」がするのである。

皮肉なのは、坊っちゃんが赴任した都市を、〈イギリス〉や〈ロシア〉を混在させた〈西洋列強〉の比喩と見なすことが、この作品を「佐幕派」と反対の側に置くことになることであろう。平岡敏夫は漱石が「佐幕派」であることの根拠として『坊つちやん』を取り上げたのだったが、主人公の赴任先を「ロンドン」の比喩と見なすことは、当然彼を西洋への追随と対峙をつづけた〈近代日本〉の比喩として浮び上がらせることになる。そして〈近代日本〉を率いたのが薩長を中心とする倒幕派の勢力である以上、『坊つちやん』はむしろ倒幕派を受け継ぐ心性を語った作品として眺められるのである。舞台が松山に同定される都市であることも、この地が江戸時代においては佐幕派の藩だったことによるのではなく、今見たような日露戦争への縁の深さによっていると考える方が自然なはずである。

また平岡や小谷野敦、小森陽一のような、坊っちゃんを「佐幕派」と見なす視点からは、終盤に描かれる、坊っちゃんと山嵐が共闘して赤シャツ、野だいこに制裁を加える場面は、戊辰戦争の意趣返しとして捉えられがちであった。それは山嵐が、戊辰戦争に敗れた会津の出身であることから、彼と手を組む坊っちゃんはその共感者としての佐幕派となり、したがって彼らが対峙する赤シャツらは〈薩長〉の比喩であることになるからである。けれどもこれはきわめて蓋然性の低い解釈である。第一に漱石のなかに、戊辰戦争を作中で表象しなくてはならな

い動機はないというほかはない。先に触れたように、漱石はつねに未来との関わりのなかで自身と国のあり方を考えようとする文学者であり、『坊っちゃん』が発表された明治三九年の「断片」には、「明治ノ三十九年ニハ過去ナシ。単ニ過去ナキノミナラズ又現在ナシ、只未来アルノミ」と記している。加えて漱石は〈江戸〉や〈徳川〉に対しては、むしろ侮蔑的な姿勢を示していた。こうした志向を持つ文学者が、四十年近く前におこなわれた国内の戦いを、徳川幕府の側に立って作中に盛り込むということは考え難いのである。

また坊っちゃんは赤シャツらに制裁を加えることについて、「貴様等は奸物だから、かうやつて天誅を加へるんだ」と宣言し、彼らを待ち受けつづける場面では、自分たちを「天誅党」に見立てているが、「天誅党」は幕末の文久六年（一八六六）、大和五条の幕府代官所を襲った倒幕派の一党であり、ここではっきりと坊っちゃんは自分を過激な倒幕派に擬しているのである。さらに加えれば、坊っちゃんのモデルとされる、松山中学での漱石の同僚であった数学教師の弘中又一にしても長州の出身であり、倒幕派との類縁を持つのである。

5　『坊つちやん』としての日本

このように眺めれば、作中の表象はそのほとんどが、坊っちゃんを佐幕派ではなく倒幕派の側に置く方向性を示していることが分かる。それに逆行する要件となるのが、坊っちゃんが赤シャツらと対峙するべく共闘することになる相手である山嵐が、会津出身であるという設定である。この連帯の関係が、坊っちゃんを佐幕派とする重要な根拠になるわけだが、むしろそこにこそ、漱石の未来志向の眼差しが込められている。すなわち戊辰戦争における長州――会津という対立は、国際的な視点から見れば無意味なものにすぎず、そうした国内的な反目を乗り越えて連帯する度量がなければ、イギリスやロシアといった〈西洋列強〉に対峙しえないという認識が、漱石の内に抱かれていたことが示唆されるからである。見逃せないのは、戊辰戦争に相当する対立が作中に盛り込まれていることで、イナゴ騒動が山嵐の煽動によるものという、釣り船での赤シャツのさやきを鵜呑みにした坊っちゃんは、それ以降しばらく彼と口もきかない険悪な関係に陥っている。これはまさに長州と会津の反目に相当するものであり、それを解消することによって、坊っちゃんは山嵐とともに、赤シャツらと対峙する姿勢を得ることになるのである。

こうした終盤の展開に込められた寓意に示されるように、漱石は佐幕、倒幕という幕末の図式自体に対するこだわりを持っていたわけではない。坊っちゃんが倒幕派の文脈を強く備えているのは、結局その勢力によって近代日本の進展が形成されてきたからであり、漱石の眼目はもっぱら、近代日本の形象としての主人公の輪郭や行動に託す形で、自国をめぐる国際関係を、批判を交えつつ表象することにあった。主人公を中心とする登場人物間の人間関係を、日本と他国との関係の寓意的な縮図として表象するのは、「吾輩」と鼠との争いや、苦沙弥と中学校の生徒たちの対立を日露戦争の戯画として提示していた、『吾輩は猫である』以降、漱石の作品世界で繰り返されていく

手法である[18]。『坊つちやん』はその手法のとりわけ露わな作品であり、赤シャツに対峙する決意を固める坊っちゃんは「成程世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰りは腕力だ」と考え、個人間の喧嘩が国家間の戦争の写し絵であることを明らかにしている。この照応は、明治三八年に書かれた「創作家の立場」（一九〇五）で、「僕は軍人がえらいと思ふ、西洋の利器を西洋から貰つて来て、目的は露国と喧嘩でもしやうといふのだ」（傍点引用者）と述べられていることによっても傍証されている。漱石の着想においては、基本的に「喧嘩」は国家間の「戦争」の代理的表象なのである。

『坊つちやん』が、日本が経験した国家間の争闘を写し取っていることは、終盤の展開だけでなく、そこに至る全体の構図にちりばめられている。坊っちゃんが赤シャツに「天誅」を加えることを決意したのは、直接には同僚の英語教師の「うらなり」の婚約者であった、「マドンナ」を赤シャツが横取りしたと考え、山嵐がそれに同意したからであり、「今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだらうとおれが云つたら、無論さうに違ひない。あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云ふと、ちやんと逃道を拵へて待つてるんだから、余つ程奸物だ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつて見せた」というやりとりによって、二人の共闘関係が成立したのだった。

このうらなりが婚約者のマドンナを赤シャツに奪い去られる、あるいはそのように坊っちゃんと山嵐が思い込む成り行きは、端的には日清戦争後の明治二八年（一八九五）に起きた、ロシア、ドイツ、フランスによる「三国干渉」と、その後の展開と照応している。下関講和条約によって日本に割譲されることになった遼東半島が、その直後の三国の「干渉」によって返還を余儀なくされたことは、当時の日本人にとって屈辱的な事態として受け取られ、とりわけその中心であったロシアへの怨嗟が、「臥薪嘗胆」の十年間を経て日露戦争へと至ることになった。極東の平和を保全するという「干渉」の名分が建前にすぎないことは当初から明瞭であり、予想されたとおり、遼東半島にはロシアがみずから進出し、三年後の明治三一年（一八九八）には南端の旅順、大連を租借することになった。こうした経緯を踏まえているからこそ、『坊つちやん』の終盤で、うらなりに代わって赤シャツに加えられる「天誅」が、日露戦争の寓意としての意味を帯びることになるのである。

この寓意が成り立つ前提として、うらなりが坊っちゃんの分身である必要があるが、この作品でうらなりはまさにそうした存在として象られている。うらなりはそのあだ名が示すように、坊っちゃんの〈裏〉にほかならず[19]、日清・日露という戦争をおこなってきた明治日本の趨勢を、その寓意である「喧嘩」を周囲の人間との間に引き起こしがちな坊っちゃんに託しつつ、にもかかわらず西洋諸国に対して真に自律的な姿勢を取ることができない〈裏〉の弱さを、うらなりという弱々しい男の輪郭に込めたと考えられる。この分身性を示唆するように、同僚たちに総じて辛辣な眼を向ける坊っちゃんは、なぜかうらなりにだけは寛容であり、「おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてゐたが、うらなり君に逢つてから始めて、やつぱり

正体のある文字だと感心した位だ」という感慨を覚えているのである。

一方赤シャツに横取りされる相手であるマドンナは、遼東半島に相当する形象であることになるが、彼女に付与された名前はその寓意を強く示唆している。彼女の「遠山」という姓は、平地が少なく大半を「山」が占める地勢であり、また中国という〈遠方〉に位置するとともに、三国干渉によって一層「遠」ざけられることになった遼東半島のイメージと合致している。極東戦略において重要な位置を持ったこの半島は、不凍港としてロシアが渇望したように、帝国主義的侵攻を企てる列強の垂涎の的であり、いわば誰もがほしがる〈美女〉であった。興味深いのは、この時期に現実に遼東半島を〈美女〉に譬える俗謡的な歌が作られていることである。その作者は森鴎外であり、日露戦争時の明治三八年に作られ、「箱入娘の歌」と題されたその歌の一番は次のような歌詞を持っている[20]。

西施楊貴妃生ませた親の　自慢娘の旅順ぢやけれど
昔くどいたらつひ落ちたのを　いつか忘れて養女にいつて
今ぢやロシアの箱入娘　おちぬ噂が世界に高い

ここでは遼東半島の要所である旅順が、美しい「自慢娘」に譬えられ、この娘を日清戦争の勝利によって一旦日本が手に入れることになっていたのが、三国干渉後の経緯によって「今ぢやロシアの箱入娘」になっていると前提された上で、今度の戦争において「落ちぬ靡かぬ名代の娘　日本男子が落して見せう」という内容が二番以降の歌詞に盛り込まれている。この歌が俗謡として流通したかどうかは別として、こうした内容が描かれているということは、少なくとも旅順を「箱入娘」に譬える比喩が一般的な了解の地平に想定されていたことを物語っている。だとすれば、漱石が旅順を含む遼東半島を「マドンナ」に見立てたとしても、別に奇矯な着想ではないはずである。

この作品以降漱石の多くの作品で、女性は男性同士の間で獲得が争われる客体的な存在として表象されることになるが、その基底にあるものが、日本もそこに加わることになる列強の帝国主義的拡張のせめぎ合いであり、人間同士の関係を国家間の交渉の写し絵とする漱石的手法のなかで、女性たちは中国や韓国といった、日本の侵略の対象となる植民地的空間の寓意を帯びて描出されることになる。明治三八、三九年頃の「断片」に見られる、「二個の者が same space ヲ occupy スル訳には行かぬ。甲が乙を追ひ払ふか、乙が甲をはき除けるか二法あるのみぢや」というよく知られた一節は、帝国主義の論理と漱石的世界の表象の原理にともども響き合っているといえるだろう。

こうした照応を作中に仮構することは、一見漱石が帝国主義的拡張を志向する日本の趨勢に加担していたことを物語っているようにも見える。現に冒頭で取り上げた、漱石を「佐幕派」的な反国家主義者として見なそうとする把握が強くある一方で、朴裕河のように、明瞭に漱石を国家主義への加担者として見なそうとする論者も存在する。それはむしろ新しい漱石観に属するが、朴によれば漱石は「「日本」のために、〈国家〉のために文学をやった」表現者にほかならず、強調されがちなその個人主義も、「「国家」を容認するものであるほかなかった」とされる。『坊つちやん』については、「田舎」を侮蔑的に見る主

人公の眼差しが、「都会と男」に「「文明」＝近代の部分」を収斂させつつ、国民の統合を図ろうとした近代日本の趨勢と符合するとされる。

朴の漱石に対する把握は基本的には誤りではなく、漱石が「「日本」のために、〈国家〉のために文学をやった」ことも事実である。しかし「「日本」のため」とは、母国を盲目的に是認することを意味するのではなく、むしろその現況を不十分なものと見なし、未来に向けた展開のなかでその是正を求める批判的意識の対象とするということにほかならない。先に引用した、各作品にちりばめられる近代日本に対する批判と揶揄の言葉がそこからもたらされたものであることはいうまでもない。『坊っちゃん』における「田舎」にしても、それは文字通りの田舎である以上に、遠方の国としての〈西洋〉を象っていたのであり、それゆえ坊っちゃんの赴任先の中学校を牛耳っている赤シャツは、坊っちゃんよりも〈都会的〉な風体をしていたのである。そして坊っちゃんが赤シャツに「天誅」を加えることも、日露戦争の経緯を踏まえながらも、単純に自国の凱歌を歌うためだけではない。この争いの結果、中学校を去ることになるのは坊っちゃんの方であり、赤シャツのこの世界における覇権は持続するであろうからだ。それは当然、日露戦争に勝ったところで、日本が国際社会において〈西洋列強〉を凌駕した存在になるわけではなく、主導権はやはり彼らの側にあるという、漱石の醒めた眼差しを浮上させることになるのである。

そして坊っちゃんが坊っちゃんと呼ばれること自体が、維新以降の日本の進み行きに対する漱石の批判的眼差しの表現であった。坊っちゃんは「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊つちやんと抜かしやがつた」と言って腹を立てるように、周囲の人間にこの呼称で呼ばれることを好んでいないが、にもかかわらずそれが作品の表題に取られている。このいわばメタレベルから付与された表題は、結局日本がロシアへの勝利によって「一等国」を自称しようが、冷静に見れば〈大人〉である西洋と同列になったわけではなく、未だに「坊っちゃん」という〈子供〉の域にあるという作者の認識を物語るもの以外ではない。福沢諭吉が「西洋流の事を行ひ西洋流の物を作るの錬磨に於ては、我日本人の齢は僅に十歳以上未だ二十歳に足らざる少年の如し」（『通俗国権論』）と述べ、勝海舟が「西洋は規模が大きくて、遠大だ。［中略］まるで、日本などは、子供扱いだ」（『海舟餘波』一八九九[21]）と語るように、西洋諸国との比較のなかで、近代化の途上にある日本を〈子供〉のイメージで捉えるのは、明治期の知識人に一般的な傾向である。いいかえれば、個人と国家を相似的に連関させる着想が、漱石を含む彼らの思考の基底にあり、そこに彼らが国家に批判的な国家主義者としての、遡及的な「倒幕派」である所以を見ることができるのである。

註

（1）木村毅はこの著作で、「幕府方」の所産として近代文学を捉える見方のさらなる先行者として山路愛山を挙げている。山路は「基督教評論」で幕臣や会津人といった「国破山河在の境遇を経験したるもの」によって、明治期のキリスト教を基軸とする言説が担われたという観点を提示している。ただ木村の『新文学の霧笛』においては、もっぱら〈出身地〉

によって作家を幕府方、反幕府方に分類することに力が注がれ、その表現の性格がどのように「佐幕派」的であるかということにはほとんど触れられていない。

(2) 小森陽一「矛盾としての『坊っちゃん』」(『漱石研究』第12号、一九九九・一〇)。

(3) 半藤一利『漱石先生　お久しぶりです』(平凡社、二〇〇三)。

(4) 大久保利謙『佐幕派談義』(吉川弘文館、一九八六)。

(5) 大久保利謙は福地の『幕府滅亡論』について、「いかにも突っぱなした外様的冷淡さ」があるとし、また福沢も「幕府に対する同情は露ほどもな」い点で「外様幕臣」としての性格によって捉えている。

(6) 福地桜痴の引用はすべて明治文学全集11『福地桜痴集』(筑摩書房、一九六六)による。

(7) 福沢諭吉の引用は『福翁自伝』、岩波書店『福沢諭吉全集』第七巻(一九五九)により、それ以外は明治文学全集8『福沢諭吉集』(筑摩書房、一九六六)によった。

(8) 引用は勝海舟全集第21巻『氷川清話』(講談社、一九七三)による。

(9) 漱石の引用はすべて岩波書店『漱石全集』(一九九三〜九九)による。

(10) 『文学論ノート』が執筆されたのは、漱石の滞英三年目に当たる明治三五年(一九〇二)である。漱石は帰国後このノートを東京帝大での英文学講義のために書き換え、『文学論』としてまとめられることになるが、『ノート』執筆時の企図は「(1) 世界ヲ如何ニ観ルベキ」「(2) 人生ト世界トノ関係如何、人生ハ世界トハ関係ナキカ、関係アルカ、関係アラバ其関係如何」(いずれも「大要」)といった、「世界」のなかに自己と日本という自国をいかに位置づけるかという問題の追求であり、「欧州」と比較した「日本ノ地位」への考察もそこからもたらされている。『文学論』「序」に記された、「一切の文学書を行李の底に収めたり」という記述も、実は『文学論』よりも『ノート』の方により該当するのである。

(11) 『柳橋新誌』の引用は明治文学全集4『成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集』(筑摩書房、一九六九)による。

(12) 前田愛は『柳橋新誌』について「江戸の洗練された文化が、田舎武士の異質なエネルギーに遭遇したさいの抵抗感の表現」であり、「江戸人である柳北の繊細な美意識は、薩長の田舎侍の野蛮な活力に刺戟を受け、そこに文学的な結晶作用が促進された」と述べている。(『シンポジウム日本文学　幕末の文学』学生社、一九七七)佐幕派の本質がそこにあるならば、『坊っちゃん』の主人公はその「異質なエネルギー」や「野蛮な活力」によって、やはり「薩長の田舎侍」的な性格を持つといえよう。

(13) さらに加えれば、同じ年の森田草平宛書簡でも漱石は、「功業は百歳の後に価値が定まる。[中略]百年の後には百の博士は土と化し千の教授も泥と変ずべし」(一九〇六・一〇・二一付)と記し、現在の社会的な価値が百年後には激変するであろうという見通しを語っている。

(14) 二葉亭四迷の引用はすべて『二葉亭四迷全集』(筑摩書房、一九八五)による。

(15) 引用は明治文学全集83『明治社会主義文学集第1』(筑摩書房、一九六九)による。

(16) 坊っちゃんがたいらげた「天麩羅蕎麦」の「四杯」という数も、日本の近代化の経緯と無縁ではない。この「四杯」という言葉が想起させるものは、「黒船」来航時の日本人の反応を諷した「泰平の眠りを覚ます蒸気船(上喜撰)たつた四杯で夜も眠れず」というよく知られた狂歌であろう。「天麩羅」も〈南蛮〉のイメージを持つポルトガル語を起源とすることは周知のとおりであり、それを念頭に置けば、この「天麩羅蕎麦」を「四杯」という過剰な食欲を示す数字には、〈南蛮——西洋〉に対する対抗的な姿勢が含意されているともいえよう。

(17) 平岡敏夫『「坊っちゃん」の世界』(塙新書、一九九二)。
(18) この点については拙著『漱石のなかの〈帝国〉――「国民作家」と近代日本』(翰林書房、二〇〇六)で詳述している。
(19) うらなりが坊っちゃんの〈裏〉であることの指摘は平岡敏夫『漱石ある佐幕派子女の物語』(前出)でもなされている。
(20) 引用は岩波書店『鴎外全集』第十九巻(岩波書店、一九七三)による。なおこの歌詞の参照は末延芳晴『森鴎外と日清・日露戦争』(平凡社、二〇〇八)によって示唆されている。
(21) 朴裕河『ナショナル・アイデンティーとジェンダー――漱石・文学・近代』(クレイン、二〇〇七)。
(22) 引用は日本の名著32『勝海舟』(中央公論社、一九八四)による。